輸血療法委員会

委員長　榮枝弘司

活動内容

輸血療法委員会は、高知県合同輸血療法委員会と連携を保ちながら、「適正輸血の推進」を実践する事を目標とし、病院長、医師、看護師、薬剤師、臨床検査技師、事務、外部委員（高知県赤十字血液センター）などの輸血に関わる多部門のメンバーで構成され、隔月（偶数月）に開催しています。また、高知県内で最初の I&A 認定施設としても認められています。

血液製剤の科別の使用量と廃棄率、副作用に関しては下記の通りですが、現在のところ重篤な副作用もなく、廃棄率も年々低下しています。

輸血用血液製剤の使用量は増加していますが、3 年以上続く COVID19 感染症のため、全国的に献血量が減少してきており、今後も安全で適正な輸血療法の実施と廃棄量の減少に努めていきます。

輸血用血液製剤　使用量・廃棄率（2013～2022 年の推移）

2022 年の輸血用血液製剤使用量は、2021 年と比較し 2%減少しています。

廃棄率は年々低下しており、2022 年は 0.3%となっています。

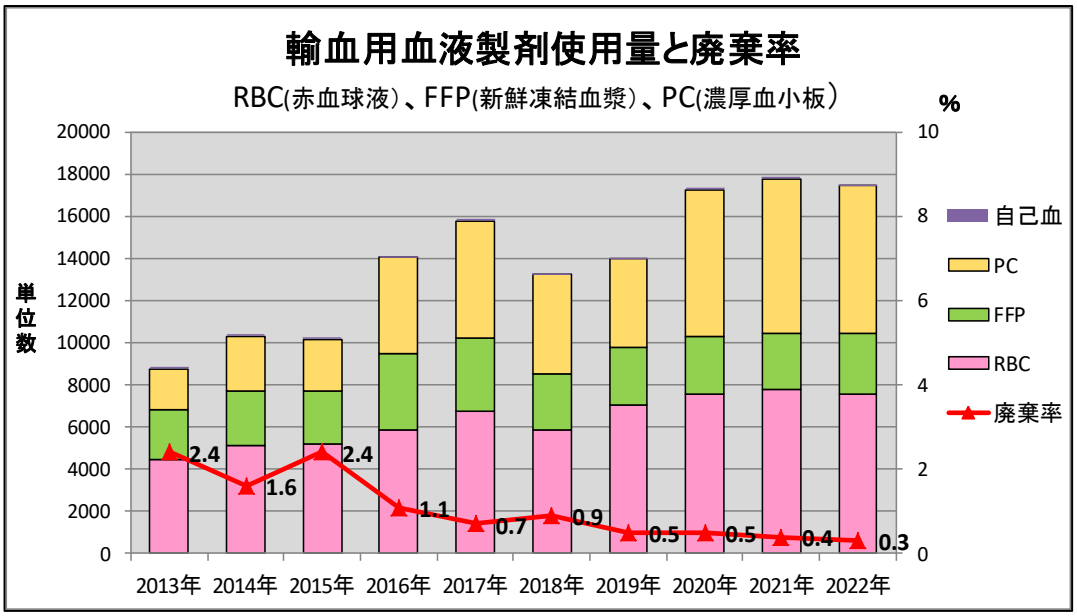

図 1

輸血用血液製剤　科別使用量

RBC（赤血球液）は、心臓血管外科の使用量が 1438 単位と最多で、消化器内科が 1310 単位、循環器内科が 1308 単位でした。　FFP（新鮮凍結血漿）の使用量は心臓血管外科の 1046 単位、PC（濃厚血小板）の使用量は血液内科の 2750 単位が最多でした。

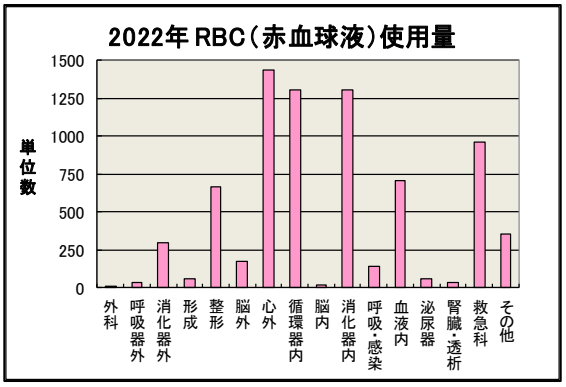

図 2

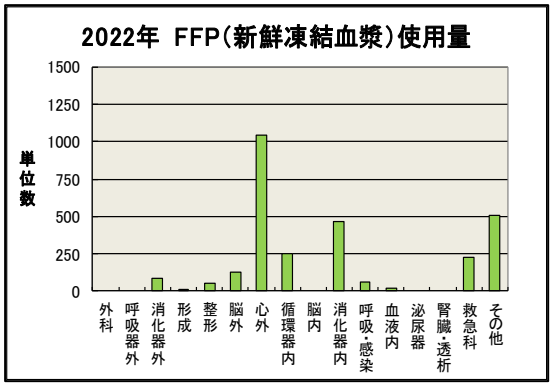

図 3

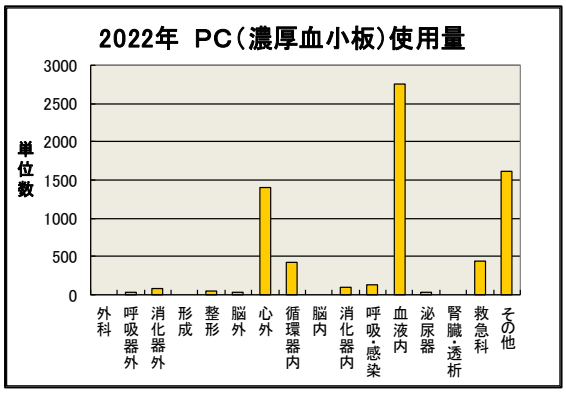

図 4

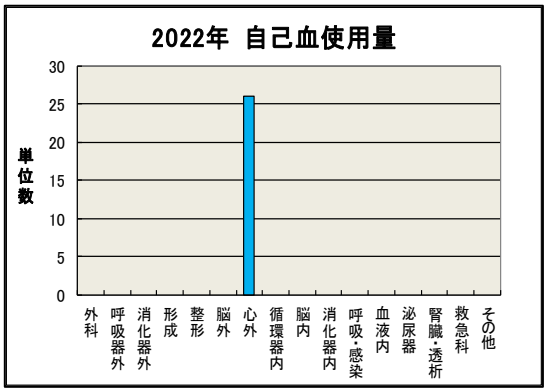

図 5

アルブミン製剤　使用量

2022 年の総使用量は昨年に比べて微増しており、内科の使用量が増加しています。

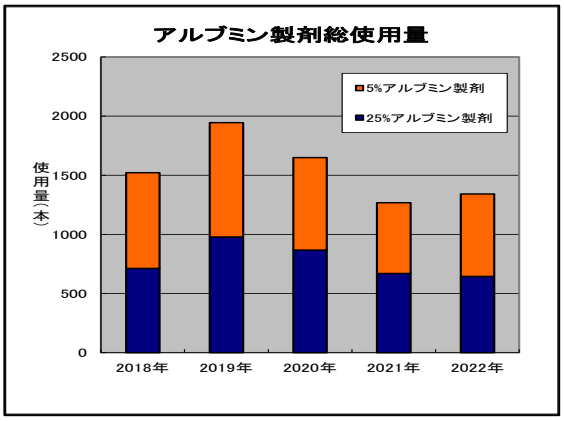

図 6

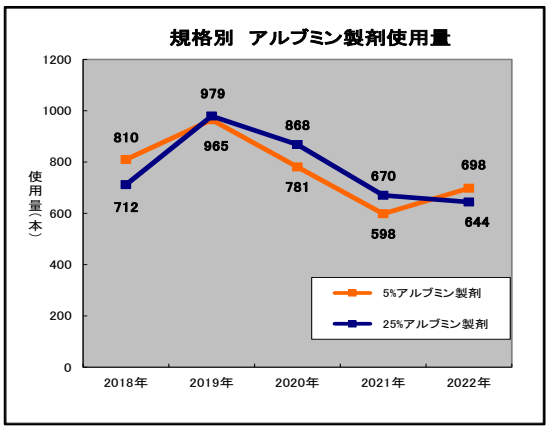

図 7

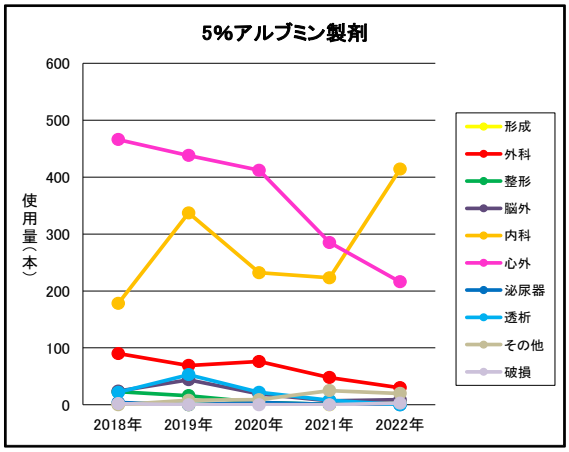

図 8

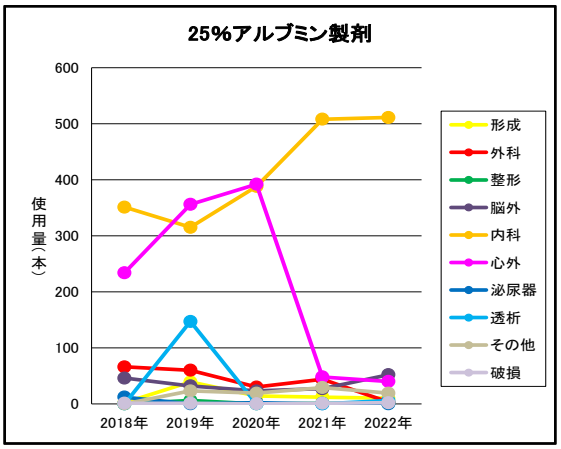

図 9

タイプ＆スクリーン（T&S）件数

2022 年の依頼件数は 1208 件、実施率は 20%でほぼ横ばいです。診療科別の依頼件数では、整形外科が多く、次いで心臓血管外科、消化器外科と続いています。

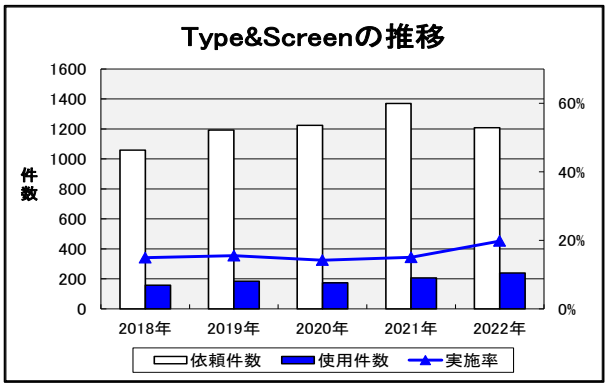

図 10

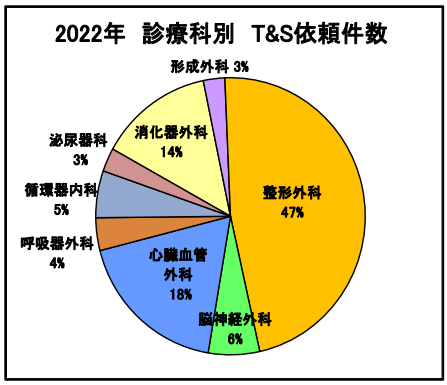

図 11

自己血件数

2022 年の心臓血管外科手術（開胸・開腹術）は合計 173 件、整形外科手術は 72 件、合計 245 件に回収式自己血を施行しました。一方、貯血式自己血は 13 件でした。

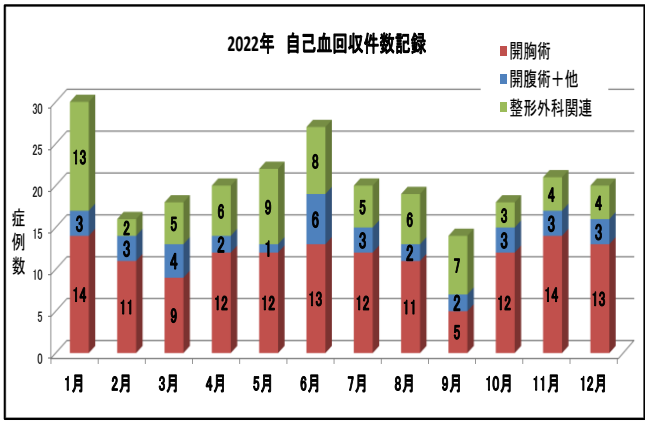

図 12

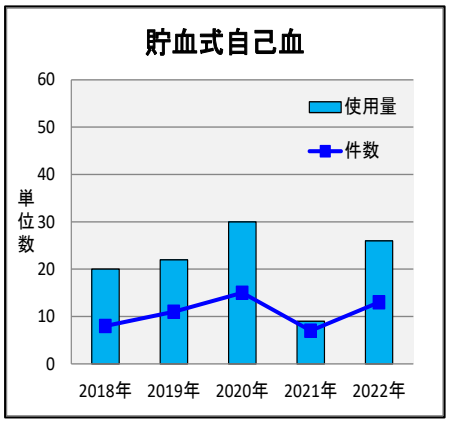

図 13

副作用報告

発生率は1.4%で、重篤な副作用はありませんでした。

表1

	副作用			使用量	
	バック数	実人数	発生率	バック数	単位数
	73	**39**	**1.4%**	5280	17488
【製剤別】					
RBC	34	19	0.9%	3797	7592
FFP	16	7	2.1%	767	2840
PC	23	13	3.3%	703	7030
自己血	0	0	0.0%	13	26

表2

副作用項目		副作用件数		
		RBC	FFP	PC
A.非溶血性副作用		41件	16件	34件
症状項目	①1℃以上の発熱	12		7
	②蕁麻疹	14	9	5
	③悪寒	3		1
	④戦慄	2		
	⑤冷汗			
	⑥発疹	6	5	9
	⑦掻痒感		1	8
	⑧悪心			
	⑨嘔吐	1		
	⑩胸痛			
	⑪顔面紅潮			2
	⑫血圧低下			
	⑬ｱﾅﾌｨﾗｷｼｰ様反応			
	⑭ショック	1		
	⑮ヘモグロビン尿			
	⑯その他	2	1	2
B.溶血性副作用		0件	0件	0件
	急性溶血			
	遅延性溶血			
C.輸血後感染症		0件	0件	0件
	HBV			
	HCV			
	HIV			
	その他			
合計(件)		41	16	34

注:件数は全てバック当たりとします。ただし、A)の症状項目のみは重複可とします。